

町長

ひとりごと

(59)

斉藤 譲

私達は、ふだん「いのち」という言葉に勿体をつけ、好んで使っている。「いのち懸け」「いのちの尊さ」「いのちは、地球より重い」などなどよく注意してみると、いろんな場面であらゆる人が口にしてるのである。演歌の世界などでも「いのちくれない」「いのちのかぎり」「いのちあずけます」などあげれば枚挙にいとまがないほど、曲名や歌詞の中に登場している。これが任侠の世界ともなると、いのちの上に義理を重ねる厳しい掟の渡世であり、いのちを張って信頼の絆を結ぶのであるから、やたらと「いのち頂戴！」などという物騒な言葉が、飛び交うことになる。尤も、これは映画や小説の受売りであり、果たして、これに出てくるような、弱きを助け、強きをくじく気性に富んだ任侠が、実在したのか、またしているのか私にはわからない。

▼唯、いずれの場合も、いのちの重さや、尊さを強調しているのであるが、私には何しか一旦口をついてでた、いのちを飾った言葉には、空気のぬけた風船のように存在感のない、安っぽいにおいがしてならない。

むしろ、無意識の飾らない言葉や、人の表情の中にこそ時折はっとするほど、それを感ずることがある。私は最近、そんな場面に、二度ほど出逢った。

その一場面は、去る十一月二十一日に行われた、町の戦没者追悼式典の中であった。遺族を代表して、長塚の吉田まささんが、「思い出の辞」を述べられた。

「空襲警報が鳴る度に、暗闇の防空壕に子供といっしょに逃げこんで、じっと息を凝らし、頭の大小を手ざわりして兄弟を見分けました。」

「ひるま義父母が、堀って選り分けたさつま芋を、小学生

の小さな子供に手伝ってもらいながら、幾晩も俵詰を納訥として、原稿を読みあげる吉田さんの表情には、何の気負いも術もなかった。その髪には白い霜が降り、温顔には深い皺が刻まれ、そして丸くなった肩の辺りには、半世紀にも及ぶ長い苦勞の影が宿っていた。

しかし、吉田さんの語る言葉の中には、苦しかったという



うことばは無かった。それがまた逆に、聞く人には尚更苦勞が偲ばれて、胸を打ち涙を誘った。会場のあちこちで、目頭を押える姿がひろがった。私はこの時、「ご主人の戦死は、自身のいのちを失くしただけではなく、家族、とりわけ若き妻のいのちから、躍動する心を奪い、耐え忍ぶ心だけを残していったのではないかと

思った。

壇上に立つ吉田さんに、そんな思いを巡らせているうちに、いつしか止め処もなく、涙が溢れてきてしかたがなかった。世代交替の目立つ式典会場ではあったが、靈前に献花をする老いた母や妻の姿は、戦争犠牲者の十字架を背負いながら、いのちの大切さを無言のうちに訴えかけているようであった。

靖国の宮に御霊は鎮るも折々帰れ 母の夢路に

私は、この和歌の朗詠を聞く度に、胸がしめつけられるほど、子を思う母のたまらなく切ない心情と、母と子のいのちの一体性を感じるのである。

▼さて、もう一場面は、先月町の行政委員といっしょに一泊旅行をした際の、バスの車中でのことである。同委員の中に、宮内区長の越川昭さんという方がいる。越川さんは、宮内でなかなか区長が決まらないで困っていた時、自らが名乗り出て引受けたという、たいへん男気のある方で、既に十年前にも区長を歴任されている。この越川さんは、昨年愛妻を亡くし、息子さんと二人ぐらしである。多少飲兵衛ではあるが、人柄は無類よく、誰からも親しまれている。

少し酒が入った頃、越川さんが私の隣の席にやってきた。いろいろな話しをしているうちに、晩酌はどのくらいやるのかと聞いてみた。

「毎晩、ビール一本に、酒二杯だよ。三杯以上やると、たまらなく淋しくなっちゃうから、外へ飲みに出かけてしまっんだ。だから、できるだけ二杯でやめて、仏壇の前で、母さんに手を合わせるんだ。」

「母さんは、俺が交通事故で三日も人事不省になったとき、一睡もしないで看病をしてくれた。母さんのお陰で助かったんだ。俺はその後も酒を飲み続けて、ずいぶん心配をかけたけど、母さんは一度も愚痴をいわずに、よく尽くしてくれた。そんな母さんが、こんなに早く死んじゃうなんて。母さんは、一度も悪いことなんかしていないんだ。」

いつしか、越川さんの目から涙が溢れ、からだが大刻に震えていた。

この時、私は越川さんの胸の中を吹き抜ける、悲しい風の音を聞いたような気がした。

(越川さん多謝)